

中学生における自傷行為の経験率, 性差と心理社会的要因

—— 神奈川県公立中学校における疫学調査 ——

関本 富美子*¹・朝倉 隆司*²

養護教育分野

(2017年6月21日受理)

SEKIMOTO, F. and ASAKURA, T.: The Prevalence, Gender Difference, and Psychosocial Factors of Nonsuicidal Self-injury in Junior High School Students: Epidemiologic Study in a Public Junior High School, Kanagawa. Bull. Tokyo Gakugei Univ. Division of Arts and Sports Sciences., 69: 183-191. (2017)

ISSN 1880-4349

Abstract

The objectives of this study were to examine prevalence rates and gender differences in nonsuicidal self-injury including punching self or objectives, cutting, inscribing, and burning and to identify associations between these self-injurious behaviors and psychosocial factors such as parents-child relationship, mental health, and hostile aggression. Furthermore, after created a category (i.e. number of types of self-injury) by counting number of different self-injury types that one student performed, we examined prevalence rates and gender difference. We also clarified associations between the category and psychosocial factors.

The participants of this study were 475 students from a public junior high school in Kanagawa prefecture. We conducted an anonymous questionnaire survey from November to December 2008.

We found that punching self or objectives was the most prevalent self-injury: performed by 39.4% of the participants. The prevalence rates were 43.2% in boys and 35.1% in girls, and were not differed by gender. The second most prevalent self-injury was cutting (13.2%) and the rate was higher in girls (15.3%) than boys (11.2%). Our result revealed that about half of the students had experiences of performing some types of self-injury. According to the results of logistic regression used respective self-injury as an objective variable, gender difference was found in punching self or objectives; boys were more likely to perform punching as self-injurious behavior than girls. Common psychosocial factor in the four types of self-injury was parents-child relationship. As a result, we pointed out that maintaining parents-child relationship in good condition is a crucial factor to help preventing and reducing self-injury in early adolescence.

Further examination on number of types of self-injury revealed that “no self-injury” who did not perform any self-injury was 53.9%; “one type of self-injury” was 33.2%; “more than two types” was 12.9%. A major finding of multinomial logistic regression was that those who performed diverse types of self-injury showed poor or worse conditions of parents-child relationship, mental health, and irritation.

In conclusion, the present research found that almost half of the students performed self-injury and good conditions of parents-child relationship and mental health are critical factors to prevent and reduce self-injury in junior high school students.

Keywords: self-injury, junior high school students, psychosocial factors, parents-child relationship, General Health Questionnaire-12

*1 横須賀市立栗田小学校 (239-0833 横須賀市ハイランド2-41-1)

*2 東京学芸大学 養護教育講座 養護教育分野 (184-8501 小金井市貫井北町 4-1-1)

Department of School Health Care and Health Education, Tokyo Gakugei University, 4-1-1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo 184-8501, Japan

要旨: 本研究の目的は、「殴打」「切る」「彫る」「火傷」という4種類の自傷行為を取り上げ、それらの経験率や性差を明らかにし、自傷行為と親子関係や精神健康度、敵意的攻撃性という心理社会的要因との関連を検討することである。さらに、一人が行っている自傷行為の種類をカウントして作成した「種類数」別による経験率と性差を検討し、心理社会的要因との関連を明らかにする。

本研究の調査対象者は、神奈川県内公立中学校1校の生徒475名で、調査方法は自記式質問紙調査、調査期間は2008年11月から12月である。

本研究の結果、中学生が一番多く行っていた自傷行為は「殴打による行為」であり、39.4%であった。性別にみると、男子は43.2%で、女子は35.1%であった。次に多かったのは「切る行為」(13.2%)であり、男子は11.2%、女子は15.3%であった。約半数の生徒が、何らかの自傷行為を経験していることが明らかになった。それぞれの自傷行為を目的変数としたロジスティック回帰分析の結果、性差が認められたのは「殴打による行為」のみで、女子より男子で経験率が高かった。そして、すべての自傷行為に共通していた心理社会的要因は、親子の信頼感であった。よって、中学生の自傷行為では、親子の信頼感が重要な要因であり、親子関係を良好に保つことが自傷行為の予防や軽減の鍵となっていた。

また、自傷行為を種類数別にみると、「行為なし」は53.9%、「1種類」は33.2%、「2種類以上」は12.9%であった。種類数を目的変数とした多項ロジスティック回帰分析の主な結果では、多種多様な方法で自傷行為を行う者ほど、親子関係、精神健康度、いらいらにおいて良好でない状態を示していた。

本研究により、中学生の約半数が自傷行為を経験しており、その予防や軽減には良好な親子関係と精神健康が重要な要因と言える。

1. はじめに

自傷行為とは、自分で自分の身体を傷つける行動を指し、一般的によく知られているのは、剃刀などで手首を切るリストカットである。四肢、顔や頸部、腹部や胸部といった身体の様々な部位を刃物で切る、皮膚をひっかく、身体を鋭いもので突き刺す、殴る、噛む、火傷を負わせることなどが含まれる。

近年、中学校では、リストカット等の自傷行為が、生徒たちの間に目立ち始め、学校現場でも大きな問題の一つとなっている。日本の先行研究において、中学生の刃物で切る様式の自傷行為の経験率は、男子2.13%、女子3.50%¹⁾、男子5.9%、女子7.0%²⁾、男子8.0%、女子9.3%³⁾と報告されている。また、自傷行為の平均開始年齢は12歳前後であり、中学入学前後の時期であった⁴⁾。一方、欧米では、おおむね男子の3~5%、女子の10~17%に自傷行為の経験があることが明らかにされている⁵⁾。

自傷する青年の特徴の一つに、衝動性や怒り、敵意が認められやすいことが指摘されており⁶⁾、さらに、一般中高生における自傷経験者では、顕著な不安・抑うつ傾向や低い自尊心などの特徴が指摘されている⁷⁾。多様な方法で自傷する者ほど深刻な解離症状や抑うつ

症状を呈しており、そのような者では、ボディピアスや刺青(タトゥ)のような身体改造も多く認められた⁸⁾という報告もある。

先に述べたように現在のところ、中学生による自傷行為を検証した研究はわずかであり、わが国における自傷行為の実態を把握するためにも、中学生において疫学調査を行う必要があると考えられる。

そこで本研究は、中学生を対象に、比較的良好に観察される「殴打」「切る」「彫る」「火傷」による4種類の自傷行為を取り上げて調査し、それらの経験率、性差を明らかにし、自傷行為と親子関係や精神健康度、敵意的攻撃性という心理社会的要因との関連を検討した。次いで、一人が何種類の自傷行為を行っているかをカテゴリー化した「種類数別」における経験率、性差を検討し、心理社会的な要因との関連を明らかにした。

なお、本研究では松本⁹⁾が述べている定義を採用し、「自傷行為とは、自殺以外の意図から、非致死性の予測をもって、故意に、そして直接的に、自分自身の身体に対して非致死的な損傷を加えること」とした。また、比較的良好に観察される、頭部やからだの一部を強く打ちつけたり、壁などを殴る行為(以下、「殴打による行為」)、刃物などで皮膚を切る行為(以下、「切

る行為)], 尖ったもので皮膚に字や模様を彫る行為(以下, 「彫る行為」), タバコなどの火で自らに火傷を負わせる行為(以下, 「火傷による行為」)の4つの自傷様式を自傷行為としてとりあげた。

2. 方法

2008年11月から12月にかけて, 神奈川県内の公立中学校1校の1~3年生475名を対象に無記名自記式による質問紙調査を行った。調査項目は, 基本的属性, 親子間の信頼感に関する尺度¹⁰⁾, GHQ-12(非精神病性の軽度な精神障害をスクリーニングするための尺度)¹¹⁾, 敵意的攻撃インベントリー尺度¹⁰⁾, 自傷行為である。自傷行為に関する項目は, 回答者の自傷経験を把握する目的で, 壁に自分の拳や頭を打ちつける・タバコの火を押しつける・文字を彫る・刃物で傷つける等の経験の有無を多肢選択法あるいは自由記述により回答を求めた。

自傷行為別の分析は, 4種類(殴打, 切る, 彫る, 火傷)の自傷行為及び自傷行為全体(「わざと自分の身体を傷つけたことがある」と回答した者あるいは4種類の自傷行為を行う者)の経験率を男女別に検討した。次に, それぞれの自傷行為と基本属性, 親子の信頼感尺度, GHQ-12, 敵意的攻撃インベントリー尺度との関連を検討するため, 各自傷行為を従属変数とし, 性別, 親子の信頼感, GHQ-12, 敵意的攻撃インベントリーを独立変数としたロジスティック回帰分析を行った。

さらに, 本研究では「殴打」「切る」「彫る」「火傷」という4種類の自傷行為のうち一人が何種類行っているかを数えて, 自傷行為の種類数という変数を作成した。なお, 複数の種類を行っている者の内訳をみると, 2種類48名, 3種類7名, 4種類3名であり, 3~4種類は少数数であったため2種類以上としてまとめた。そして, いずれの自傷行為もしない者を「行為なし」, 1種類だけの自傷行為を行う者を「1種類」, 2種類以上の自傷行為を行う者を「2種類以上」の3群に分類して, 分析に使用した。

種類数別の分析では, まず自傷行為の種類数別の経験率を男女別に比較した。次に, 自傷行為の種類数を従属変数とし, 性別, 親子の信頼感, GHQ-12, 敵意的攻撃インベントリーを独立変数とした多項ロジスティック回帰分析により関連を検討した。さらに, 多項ロジスティック回帰分析で有意な関連が認められた心理社会的要因では, 種類数別に得点をKruskal WallisのH検定を用いて多重比較(Steel-Dwass法)した。

分析に当たっては, SPSS ver 18.0 for Windowsを使用し, 欠損値は分析ごとに除外して処理しているため, 分析によってデータ数は若干異なる。

3. 倫理的配慮

本研究の質問紙調査にあたり, 中学校校長に主旨説明を行い, 了解を得た上で実施した。生徒たちには調査の目的を直接説明し, 回答にあたっては, 個人が特定されないよう配慮し, 本研究の目的以外には使用しない旨を説明し実施した。

4. 結果

4.1 自傷行為別の検討

4.1.1 経験率

自傷行為別の経験率を示した(表1)。自傷行為を行う者(以下, 「自傷行為全体」)の分布は, 全体からみると231名(48.7%)であった。頭部やからだの一部を強く打ちつけたり壁などを殴る行為(以下, 「殴打による行為」)は187名(39.4%), 刃物などで皮膚を切る行為(以下, 「切る行為」)は62名(13.2%), 尖ったもので皮膚に字や模様を彫る行為(以下, 「彫る行為」)は20名(4.2%), タバコなどの火で自らに火傷を負わせる行為(以下, 「火傷による行為」)は12名(2.5%)であった。

男女別にみると, 「自傷行為全体」では男子126名(50.6%), 女子105名(46.7%)であった。「殴打による行為」では男子108名(43.2%), 女子79名(35.1%)と男子に多く, 「切る行為」では男子28名(11.2%), 女子34名(15.3%)と女子に多かった。「彫る行為」では男子10名(4.0%), 女子10名(4.5%), 「火傷による行為」では男子5名(2.0%), 女子7名(3.1%)であった。これらの自傷行為の性差を χ^2 検定により検討したところ, 有意な差は認められなかった。

表1 自傷行為の経験率

自傷行為の種類	性別 ²⁾		合計
	男	女	
自傷行為全体 ¹⁾	126 (50.6)	105 (46.7)	231 (48.7)
殴打による行為	108 (43.2)	79 (35.1)	187 (39.4)
切る行為	28 (11.2)	34 (15.3)	62 (13.2)
彫る行為	10 (4.0)	10 (4.5)	20 (4.2)
火傷による行為	5 (2.0)	7 (3.1)	12 (2.5)

注) 表中の数値は, 行為ありの人数(%)である。

¹⁾ 「わざと自分の身体を傷つけたことがある」と回答した者と4種類(殴打, 切る, 彫る, 火傷)の自傷行為を行う者である。

²⁾ χ^2 検定を行った結果, 有意な性差は認められなかった。

4. 1. 2 ロジスティック回帰分析による心理社会的要因との関連

それぞれの自傷行為と性別、親子の信頼感、GHQ-12 (精神健康度)、敵意的攻撃インベントリーとの関連を明らかにするため、強制投入法によりロジスティック回帰分析を行った (表2)。

その結果、「自傷行為全体」と有意な関連が明らかになった要因は、性別 (オッズ比0.55; 95%信頼区間0.35-0.86)、親子の信頼感 (オッズ比0.94; 95%信頼区間0.90-0.98)、GHQ-12 (オッズ比1.10; 95%信頼区間1.05-1.14)、いらい (オッズ比1.07; 95%信頼区間1.04-1.11) であった。交絡因子の調整をすると被害者意識、敵意が有意ではなくなり、新たに性別で有意な関連が認められた。これは「自傷行為全体」をする者の相対リスクが女性であることで0.55倍 (すなわち、0.55倍自傷行為をする)、親子の信頼感が1点高まると0.94倍低くなり、同様に精神健康度では1.10倍、いらいでは1.07倍高まることを意味している。

「殴打による行為」と有意な関連が明らかになった要因は、性別 (オッズ比0.44; 95%信頼区間0.27-0.70)、親子の信頼感 (オッズ比0.94; 95%信頼区間0.90-0.97)、GHQ-12 (オッズ比1.07; 95%信頼区間1.02-1.11)、いらい (オッズ比1.06; 95%信頼区間

1.03-1.10) であった。交絡因子の調整をすると被害者意識、敵意が有意ではなくなり、新たに性別に有意な関連が認められた。(表3)

「切る行為」と有意な関連が明らかになった要因は、親子の信頼感 (オッズ比0.93; 95%信頼区間0.88-0.97)、GHQ-12 (オッズ比1.11; 95%信頼区間1.04-1.17) であった。交絡因子の調整をすると、いらい、被害者意識、敵意が有意ではなくなった。(表4)

「彫る行為」と有意な関連が明らかになった要因は、親子の信頼感 (オッズ比0.91; 95%信頼区間0.84-0.99) だけであった。(表5)

「火傷による行為」と有意な関連が明らかになった要因は、親子の信頼感 (オッズ比0.88; 95%信頼区間0.79-0.98) のみであった。交絡因子の調整をすると、GHQ-12、いらいが有意ではなくなった。(表6)

分析結果を概観すると、自傷行為と有意に関連する要因として共通していたのは、親子の信頼感のみであった。

4. 2 種類数別の検討

4. 2. 1 経験率

「殴打による行為」「切る行為」「彫る行為」「火傷による行為」の4つの自傷様式のうち、自傷行為の経験

表2 「自傷行為」の有無¹⁾を従属変数としたロジスティック回帰分析の結果 (n=445)

独立変数	単変量			多変量			
		オッズ比	95%信頼区間	p値	オッズ比	95%信頼区間	p値
性別	男	1	1		1	1	
	女	0.90	0.62-1.31	0.59	0.55	0.35-0.86	0.009
親子の信頼感		0.89	0.86-0.93	<0.001	0.94	0.90-0.98	0.003
GHQ-12		1.14	1.10-1.18	<0.001	1.10	1.05-1.14	<0.001
敵意的攻撃インベントリー							
いらい		1.10	1.17-1.12	<0.001	1.07	1.04-1.11	<0.001
被害者意識		1.15	1.10-1.20	<0.001	1.03	0.97-1.10	0.38
敵意		1.11	1.05-1.17	<0.001	0.96	0.89-1.03	0.22

¹⁾ 自傷行為ありを1、なしを0とコードした。「わざと自分の身体を傷つけたことがある」と回答した者と4種類 (殴打、切る、彫る、火傷) の自傷行為を行う者である。

表3 「殴打による行為」の有無を従属変数としたロジスティック回帰分析の結果 (n=446)

独立変数	単変量			多変量			
		オッズ比	95%信頼区間	p値	オッズ比	95%信頼区間	p値
性別	男	1	1		1	1	
	女	0.75	0.51-1.10	0.15	0.44	0.27-0.70	0.001
親子の信頼感		0.89	0.86-0.92	<0.001	0.94	0.90-0.97	0.001
GHQ-12		1.13	1.09-1.16	<0.001	1.07	1.02-1.11	0.003
敵意的攻撃インベントリー							
いらい		1.09	1.06-1.12	<0.001	1.06	1.03-1.10	<0.001
被害者意識		1.15	1.10-1.21	<0.001	1.04	0.97-1.11	0.26
敵意		1.14	1.08-1.20	<0.001	1.00	0.93-1.08	1.00

注) 「殴打による行為」ありを1、なしを0とコードした。

表4 「切る行為」の有無を従属変数としたロジスティック回帰分析の結果 (n=442)

独立変数		単変量			多変量		
		オッズ比	95%信頼区間	p値	オッズ比	95%信頼区間	p値
性別	男	1	1		1	1	
	女	1.48	0.85-2.57	0.17	1.16	0.62-2.17	0.65
親子の信頼感		0.90	0.86-0.93	<0.001	0.93	0.88-0.97	0.003
GHQ-12		1.14	1.09-1.19	<0.001	1.11	1.04-1.17	0.001
敵意的攻撃インベントリー							
	いらだち	1.07	1.03-1.11	<0.001	1.02	0.98-1.07	0.29
	被害者意識	1.17	1.09-1.25	<0.001	1.05	0.96-1.16	0.28
	敵意	1.09	1.01-1.18	0.03	0.92	0.83-1.02	0.13

注) 「切る行為」ありを1, なしを0とコードした。

表5 「彫る行為」の有無を従属変数としたロジスティック回帰分析の結果 (n=444)

独立変数		単変量			多変量		
		オッズ比	95%信頼区間	p値	オッズ比	95%信頼区間	p値
性別	男	1	1		1	1	
	女	1.10	0.43-2.82	0.85	1.22	0.43-3.46	0.71
親子の信頼感		0.92	0.86-0.98	0.009	0.91	0.84-0.99	0.03
GHQ-12		1.05	0.98-1.13	0.14	1.07	0.97-1.17	0.17
敵意的攻撃インベントリー							
	いらだち	1.01	0.95-1.07	0.74	1.04	0.96-1.13	0.32
	被害者意識	0.94	0.85-1.03	0.19	0.86	0.74-1.00	0.05
	敵意	0.94	0.82-1.07	0.34	0.85	0.70-1.03	0.10

注) 「彫る行為」ありを1, なしを0とコードした。

表6 「火傷による行為」の有無を従属変数としたロジスティック回帰分析の結果 (n=444)

独立変数		単変量			多変量		
		オッズ比	95%信頼区間	p値	オッズ比	95%信頼区間	p値
性別	男	1	1		1	1	
	女	1.32	0.40-4.40	0.65	0.98	0.26-3.67	0.97
親子の信頼感		0.87	0.80-0.94	0.001	0.88	0.76-0.98	0.02
GHQ-12		1.09	1.00-1.19	0.04	1.04	0.92-1.17	0.54
敵意的攻撃インベントリー							
	いらだち	1.09	1.02-1.18	0.02	1.10	0.99-1.22	0.08
	被害者意識	1.05	0.91-1.20	0.52	0.88	0.72-1.07	0.19
	敵意	1.06	0.89-1.26	0.51	0.92	0.73-1.16	0.49

注) 「火傷による行為」ありを1, なしを0とコードした。

がない者を「行為なし」, 1種類の自傷行為を行う者を「1種類」, 2種類以上の自傷行為を行う者を「2種類以上」とし, 3群に分類して比較を行った。

自傷行為の種類数別による分布は, 全体からみると, 「行為なし」は243名 (53.9%), 「1種類」は150名 (33.2%), 「2種類以上」は58名 (12.9%)であった。

男女別にみると, 「行為なし」では男子123名 (50.6%), 女子120名 (57.7%), 「1種類」では男子95名 (39.1%), 女子55名 (26.4%), 「2種類以上」では男子25名 (10.3%), 女子33名 (15.9%)であった。

4. 2. 2 多項ロジスティック回帰分析による心理社会的要因との関連

自傷行為の種類数別と性別, 親子の信頼感, GHQ-12, 敵意的攻撃インベントリーとの関連を明らかにするため, 多項ロジスティック回帰分析を行った (表7)。

参照カテゴリーの「自傷行為なし」を基準 (1.0) に考えると, 「1種類」の自傷行為を行うリスクの増大を示した要因は, GHQ-12 (オッズ比1.07; 95%信頼区間1.02-1.12), いらだち (オッズ比1.07; 95%信頼区間1.03-1.11)であった。一方, 女子 (オッズ比0.40; 95%信頼区間0.25-0.67) は, リスクを減少させる要因

表7 自傷行為の様式の「種類数別」¹⁾を従属変数とした多項ロジスティック回帰分析の結果 (n=424)

独立変数	1種類			2種類以上			
	オッズ比	95%信頼区間	p値	オッズ比	95%信頼区間	p値	
性別	男	1	1	1	1		
	女	0.40	0.25-0.67	<0.001	0.82	0.39-1.74	0.61
親子の信頼感		0.96	0.92-1.00	0.05	0.88	0.83-0.93	<0.001
GHQ-12		1.07	1.02-1.12	0.006	1.17	1.09-1.26	<0.001
敵意的攻撃インベントリー							
いらだち		1.07	1.03-1.11	<0.001	1.07	1.02-1.13	0.007
被害者意識		1.02	0.95-1.10	0.55	1.04	0.93-1.16	0.54
敵意		0.99	0.92-1.07	0.80	0.88	0.78-0.99	0.04

¹⁾ 殴打, 切る, 彫る, 火傷の4つの自傷行為の様式のうち, これらの経験がない者を「行為なし」, 1種類であった者を「1種類」, 2種類以上の者を「2種類以上」とし, 3群に分類し比較した。参照カテゴリーは「行為なし」である。

であった。「1種類」の自傷行為を行う相対リスクは, 精神健康度が低いこと, 男子であること, そしていらだちが強いと高まる。

「2種類以上」の自傷行為を行うリスクを増大させる要因は, GHQ-12 (オッズ比1.07; 95%信頼区間1.02-1.12), いらだち (オッズ比, 1.07; 95%信頼区間, 1.02-1.13) であった。一方, 親子の信頼感 (オッズ比0.88; 95%信頼区間0.85-0.93), 敵意 (オッズ比0.88; 95%信頼区間0.78-0.99) は, 自傷行為を行うリスクを減少させる要因であった。「行為なし」と比べると「2種類以上」の自傷行為を行っている者は, 親子の信頼感が低く, 精神健康度も低い。そして, いらだちは強いが, 敵意は低かった。

4. 2. 3 心理社会的要因との多重比較

多項ロジスティック回帰分析で有意な関連が認められた心理社会的要因に対して, 解釈を容易にするために, 種類数別に得点の多重比較を行った。親子の信頼感尺度の平均は, 自傷行為を行っていない者が25.92点, 1種類の者が23.05点, 2種類以上の者が18.75点であった。GHQの平均は, 自傷行為を行っていない者が22.92点, 1種類の者が26.58点, 2種類以上の者が30.83点であった。いらだちの平均は, 自傷行為を行っていない者が18.14点, 1種類の者が22.97点, 2種類以上の者が24.63点であった。敵意の平均は, 自傷行為を行っていない者が8.74点, 1種類の者が10.03点, 2種類以上の者が10.11点であった。

多重比較を行った結果, 親子の信頼感 (自傷行為なし>1種類>2種類以上), GHQ-12 (自傷行為なし<1種類<2種類以上), いらだち (自傷行為なし<1種類・2種類以上), 敵意 (自傷行為なし<1種類・2種類以上) に, それぞれ有意差が認められた (図1~4)。

親子の信頼感は, 自傷行為の種類数が増えるほど平均点は減少しており, 全ての組み合わせで有意な関連

が認められた。また, GHQ-12による精神健康度は, 種類数が増えるほど平均点は上昇しており, 全ての組み合わせで有意な関連が認められた。さらに, いらだち, 敵意といった敵意的攻撃性でも種類数が増えるほど平均点は上昇していた。しかし, 自傷行為なしと1種類, 自傷行為なしと2種類以上の間に有意な関連がみられたものの, 1種類と2種類以上の間には有意差が認められなかった。

5. 考察

5. 1 自傷行為の経験率及び性差の検討

5. 1. 1 自傷行為別の検討

中学生が一番多く行っていた自傷行為は, 「殴打による行為」であり, 全体で39.4%であった。男子では43.2%, 女子では35.1%が行っていた。次いで多いのが「切る行為」であった。全体で13.2%, 男子では11.2%, 女子では15.3%であった。また, 約半数の生徒が, 何らかの自傷行為を行っていることが明らかになった。

同じく中学生を対象とした松本²⁾らの調査では, 最も高頻度にみられる様式は, 「殴る」(男子31.7%, 女子28.1%) 行為であり, 次いで男子では「頭を打ちつける」「噛む」(14.4%), 女子では「噛む」(20.3%), 「頭を打ちつける」(11.0%) という順であった。

本研究では, 「殴る」と「頭を打ちつける」行為が一緒になっているため, それら二つを合計すると大きく変わらない結果となった。しかし, 「切る」行為では, 岡田ら¹⁾の男子2.13%, 女子3.50%, 松本ら²⁾の男子5.9%, 女子7.0%, Izutsuら³⁾の男子8.0%, 女子9.3%と比較しても男女ともに高い値であった。

こうした調査間の結果の違いについて, 以下の理由が考えられる。一つには, 調査年度の違いによって差が生じた可能性である。二つ目は, 地域性や学校の特

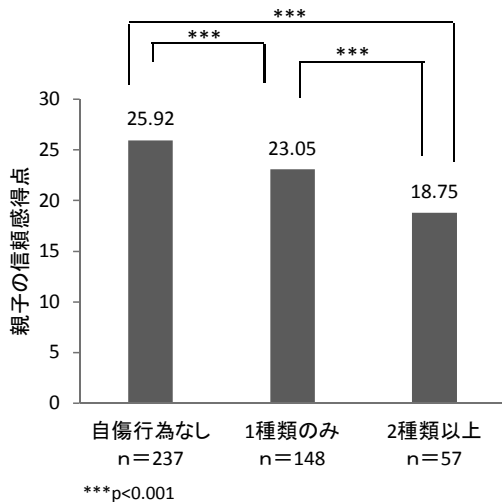


図1 自傷行為の種類数と親子の信頼感

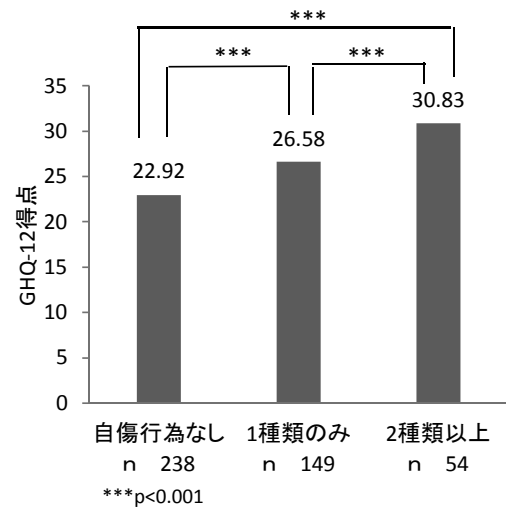


図2 自傷行為の種類数とGHQ-12

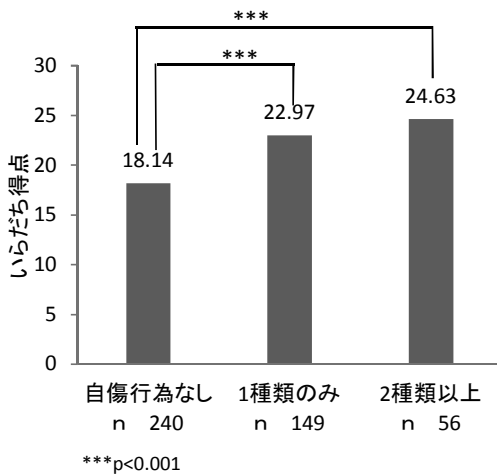


図3 自傷行為の種類数といらいだち

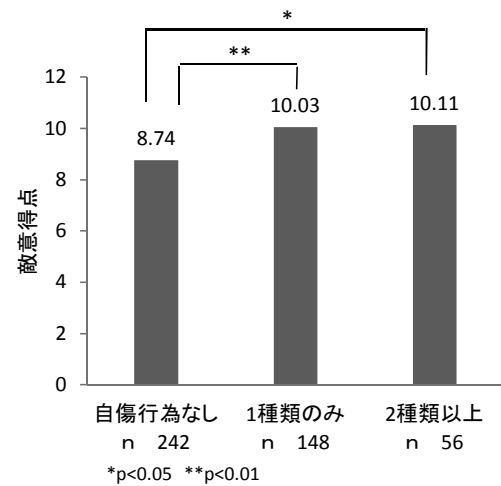


図4 自傷行為の種類数と敵意

性によるものである。調査対象校には、家庭環境に恵まれない生徒が比較的多く在籍していることも影響していると考えられる。自傷行為は、親子関係に影響を受けることが本研究からも明らかになっており、これらのことが自傷行為の経験率の高さに関連していると思われる。

また、本研究では、「自傷行為全体」と「殴打による行為」にのみ性差が認められ、男子に多かった。多くの先行研究^{1, 3, 12, 13, 14)}では、自傷行為に性差は無いという知見であるが、調査や分析方法の違いが結果の違いに影響していることも考えられる。また、「自傷行為全体」の結果は、絶対数の多い「殴打による行為」の影響を受けた可能性が考えられる。

5. 1. 2 種類数別の検討

4種類の自傷行為を一人が何種類行っているかをカ

テゴリー化した「種類数別」の分布は、「行為なし」では243名(53.9%)、「1種類」では150名(33.2%)、「2種類以上」では58名(12.9%)であった。また、本研究と分類の基準は異なっているが、少年鑑別所の男子に行った調査¹⁵⁾によると、「切る」「打つ」「焼く」の3種類の自傷行為を3群に分類し調査した結果、「行為なし」は60.1%、「1～2種類」は36.3%、「3種類」は3.6%という分布であった。さらに、本研究結果を「1～2種類」という分類に当てはめた際の割合は43.9%となり、矯正施設入所の男子より高い値となった。しかし、本研究では、対象が男子のみではなく、また、自傷行為も4種類について調査しているので単純に比較はできない。

さらに、種類数別による分類では「1種類」に性差が認められ、「2種類以上」では性差は認められなかった。自傷行為には性差がみられないという多くの先行

研究^{1, 3, 12, 13, 14)}の知見があるが、我々の知る限り、中学生において自傷行為の種類数別に性差を明らかにした研究はまだない。今後の研究課題といえよう。

5. 2 自傷行為と心理社会的要因との関連の検討

5. 2. 1 自傷行為別の関連

多重ロジスティック回帰分析により、属性、親子の信頼感、精神健康度、敵意的攻撃性の心理社会的要因との関連を検討した結果、全ての自傷行為に共通して有意な関連が認められた要因は、親子の信頼感のみであった。自傷行為において親子関係は、重要な要因であり、親子の信頼感が高まれば、自傷行為は軽減する。

一般青年における自傷経験者では、親に対する不信感を抱く者が多く、少年施設入所者における自傷経験者でも、幼少期の虐待をはじめとする様々な不適切な養育環境の中で生育した者が多いことも明らかにされている¹²⁾。親子の信頼関係を良好に保ちつつ安定した家庭環境で生活することが、自傷行為を減少させる一助になると考えられる。

5. 2. 2 種類数別の関連

多項ロジスティック回帰分析の結果、「1種類」の自傷行為を行うリスクの増大を示した要因は、精神健康度といらだちであった。女子であることは1種類の自傷行為を行うリスクを低くしていた。さらに、「2種類以上」の自傷行為を行うリスクを増大させる要因は、「1種類」と同じく精神健康度といらだちであり、リスクを減少させる要因は、親子の信頼感と敵意であった。

一方、敵意は「2種類以上」の自傷行為を行うリスクを高める要因ではなく、下げる要因になっていたことは、次のようなことが考えられる。敵意は、表面には出ない攻撃や攻撃の準備状態を表しているが、誰か特定の相手に敵意を抱きながら自傷行為を行っているとは考えにくく、ただ漠然としたイライラ感の解消やある種の高揚感を求めて行っている可能性が推測されるため、敵意はリスクを低める要因になったと考えられる。ただし、図4を見ると、他の変数を調整していないのだが、「行為なし」と比べて「1種類」と「2種類以上」の敵意得点は有意に高く、敵意との関係は慎重に解釈する必要がある、今後検討すべき課題である。

多重比較の結果、親子の信頼感は、自傷行為の種類数が増加するほど平均点は減少しており、全ての組み合わせで有意な関連が認められた。また、GHQで測定した精神健康度は、得点が高いほど精神健康が良好でないことを示しており、種類数が増加するほど平均点

は高く、全ての組み合わせで有意な差が認められた。すなわち、多様な方法で自傷行為を行っている者ほど、親子関係と精神健康度が最も低下している。

しかし、中学生において本研究のようなカテゴリでの研究は行われておらず、残念ながら比較することはできなかった。そのため、対象者は異なっているが似たような分類で少年鑑別所の男子に行った調査¹⁵⁾によると、「切る」「打つ」「焼く」という3種類の自傷行為を、「自傷なし群」「1～2種の自傷群」「3種の自傷群」の3群間に分類し、過去・現在の生活状況、心的外傷体験、自尊感情等との比較を行っていた。その結果、両親間の暴力場面を目撃した経験や破壊的行動障害の該当症状数も「3種の自傷群」で有意に高く、自尊感情は有意に低かった。要するにここでは、自傷様式の相違を議論するのではなく、その多様性の程度を評価することが臨床的には重要であり、また、自傷様式が「切る」「打つ」「焼く」すべてに及ぶ者の特徴として、上述した要因が一層顕著な形で認められていたことが重要と考えられる。

本研究においても、親子の信頼感と精神健康度は、自傷行為の種類数が増加するにつれて、有意に低下していることが明らかになった。さらに、多様な方法で自傷する者ほど深刻な解離症状や抑うつ症状を呈している⁸⁾ことから、個別の自傷行為だけに囚われることなく、「多部位・多様式の自傷行為の経験」に目を向けることの重要性、そして、一人の生徒がどのような行為を行っているかを総合的に判断し、見極める視点も重要である。

6. 研究の限界と今後の課題

本研究は、調査対象校が1校であったために、地域の特性や学校風土等の違いが結果に影響を及ぼしている可能性も考えられ、得られた結果の一般性には一定の限界がある。今後は、地域を拡大して調査対象校を増やし、より多くのデータをもとに中学生における自傷行為の現状について、さらなる検証が必要である。

また、本研究で自傷行為と親子の信頼感との関連を明らかにしたが、今後は、親子関係の基本となる家庭環境の背景要因をより詳細に調査していくことも意義があると思われる。

さらに、本研究では「殴打」「切る」「彫る」「火傷」による4種類の自傷行為に着目したが、より多様な様式の自傷行為を把握するための質問項目を工夫することも今後の課題である。

謝辞

調査にあたり，ご協力くださいました校長先生，生徒のみなさんをはじめ，多くの方々に深く感謝申し上げます。

利益相反

利益相反に該当する事項はありません。

引用文献

- 1) 岡田涼，谷伊織，大西将史ほか：中学生における自傷行為の経験率—単一市内における全数調査から—。精神医学 52 (12) : 1209-1212, 2010
- 2) 松本俊彦，今村扶美：思春期における「故意に自分の健康を害する行為」と「消えたい」体験および自殺念慮との関係。精神医学 51 (9) : 861-871, 2009
- 3) Izutsu T, Shimotsu S, Matsumoto T et al.:Deliberate self-harm And Childhood hyperactivity in junior high school students. Eur Child Adolesc Psychiatry 15:172-176.2006
- 4) 濱田祥子，村瀬聡美，大高一則ほか：高校生の自傷行為の特徴—行為ごとの経験率と自傷行為前後の感情に着目して—。児童青年精神医学とその近接領域 50 (5) : 504-516, 2009
- 5) 松本俊彦，河西千秋：自傷と自殺—思春期における予防と介入の手引き—。(K・ホートン，K・ロドハム，E・エバンス編)。金剛出版，2008
- 6) 青木省三，松下兼宗：自傷行為と攻撃性について考える。児童青年精神医学とその近接領域 50 (4) : 410-414, 2009
- 7) 松本俊彦，山口亜希子：自傷の概念とその研究の焦点。精神医学 48 (5) : 468-479, 2006
- 8) Matsumoto T, Yamaguchi A, Chiba Y, et al:Self-cutting:Patterns and implications of self-mutilation:A preliminary study of differences Between self-cutting and burning in Japanese juvenile detention Center Psychiatry Clin Neurosci 59:62-69 2005
- 9) 松本俊彦：自傷行為の理解と援助。日本評論社，2009
- 10) 堀洋道：心理測定尺度集Ⅳ。(櫻井茂雄，松井豊)。サイエンス社，2007
- 11) 岩永喜久子，後藤有紀，宮崎晴佳ほか：学部教育における看護学生のメンタルヘルスと関連要因。保健学研究 20 (1) : 39-48, 2007
- 12) 松本俊彦，今村扶美：青年期における「故意に自分の健康を害する」行為に関する研究—中学校，高等学校，矯正施設における自傷行為の実態とその心理学的特徴—。明治安田生命こころの健康財団 42 : 37-50, 2006
- 13) 山口亜希子，松本俊彦，近藤智津恵ほか：大学生における自傷行為の経験率—自記式質問票による調査—。精神医学 46 (5) : 473-479, 2004
- 14) Hawton K, Rodham K, Weatherall R:Deliberate self harm in adolescents Selfreport survey in schools in England. British Medical Journal 325:1207-1211,2005
- 15) 松本俊彦，岡田幸之，千葉泰彦ほか：若年男性における自傷行為の臨床的意義について—少年鑑別所における自記式質問票調査—。精神保健研究 52 : 59-73, 2006